2021 年度　法人内自立生活プロジェクト
アンケート報告書

作成者：自立生活プロジェクトチーム
作成日：2022 年 5 月 29 日

前文

横浜共生会（以下、当法人）では、「障がいの有無や年齢に関わらずだれでも当たり前の生活が地域の中でなしうる、またその人らしくよりよく生きることがかなう、そんな社会を創り出すこと」を法人の理念として、地域の中で、障害のある方々に日々、支援を行なっています。

しかしながら、意思決定支援や常時介助を必要とする障害のある方たちに提案される「生活」は、家族との同居やグループホーム、入所施設に限られていることが多いということが、（当法人のみならず、社会全体の傾向として）障害のある方への支援の現状といえます。

そのため、当法人では、前述した理念の実現に向けての取り組みの 1 つとして、2019 年 1 月より「知的障害者の自立生活に関するプロジェクト」への参加を開始、そして翌年 8 月より当法人独自の取り組みとして、「障害のある人の自立生活を考えるプロジェクト」（以下、自立生活プロジェクト）を発足しています。

そして、2021 年度の自立生活プロジェクトの取り組みの 1 つとして、当法人内でアンケートを行なっていて、本稿はそのアンケートの集計結果と分析結果を報告書としてまとめたものになります。

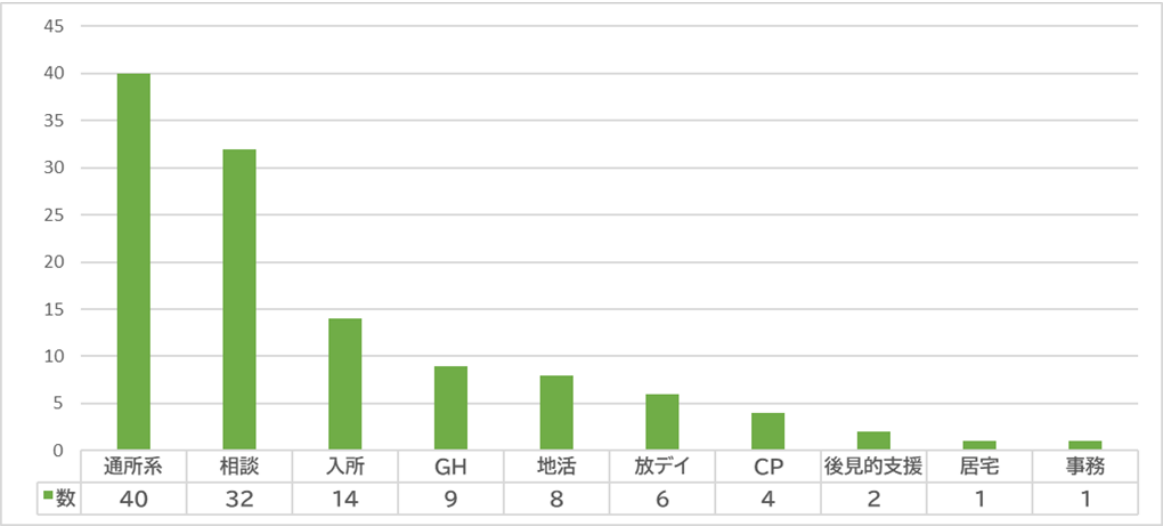
＜目次＞

ページ数	タイトル
p.1	前文
p.1	目次
p.2	(1)アンケートの概要
pp.3-12	(2)アンケート結果
p.13	(3)考察
p.14	(4)今後の課題－Ｑ６の回答より－

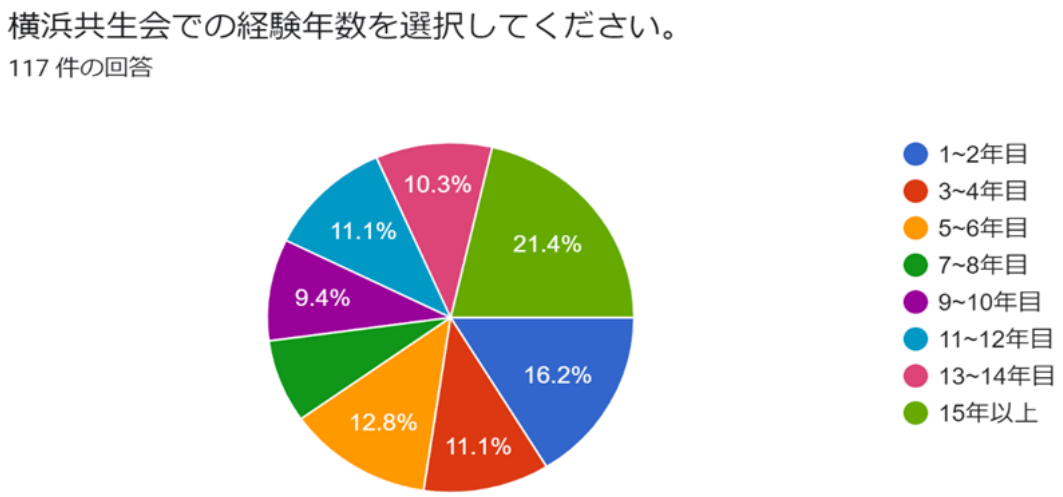
(1)アンケートの概要

- 実施者：自立生活プロジェクト（ツール作成チーム）
- 対象　：横浜共生会に所属する職員全員
- 目的　：①自立生活プロジェクトの目的である「"選択肢の幅"を広げる」ためのツール作りの素材とするため。
  ②職員の皆さんの生活の場に関するイメージ等を図り、視野を広げてもらうための素材とするため。
- 回答数：１１７回答（アンケート対象者数：約 900 程度）
- 回答期間：2021 年 10 月 1 日～31 日の 1 ヶ月間
- 方法　：法人内職員に対してチラシにて周知を行い、Google フォームで回答して頂く形

【所属】

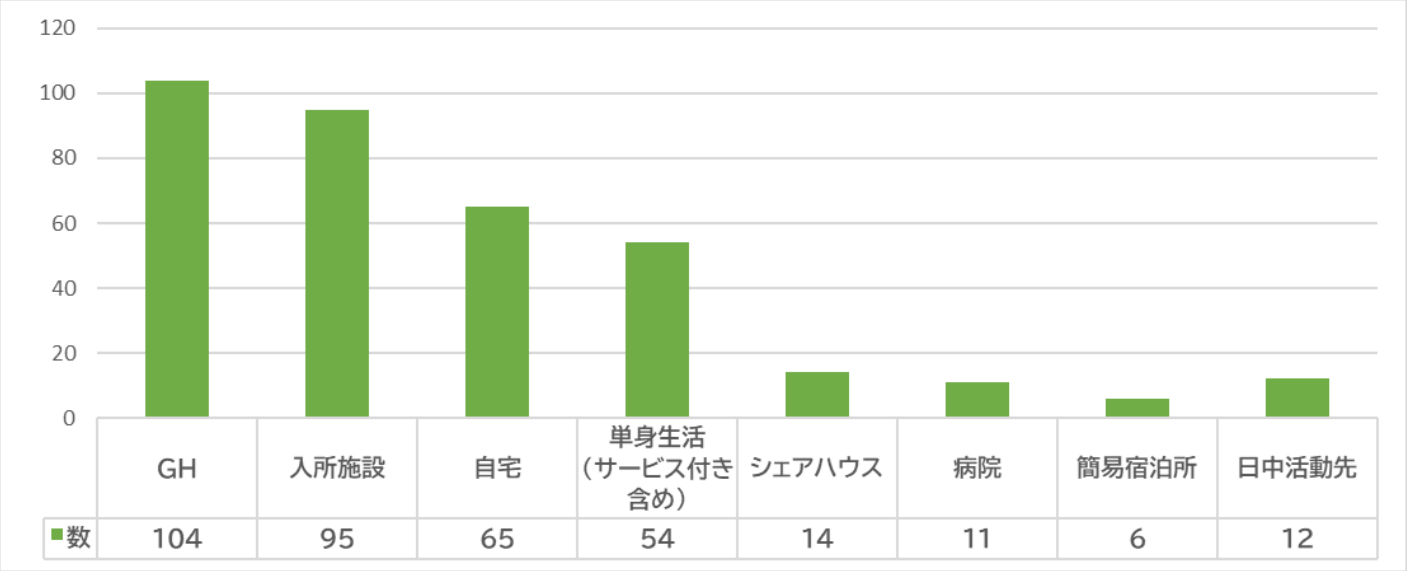


【経験年数】

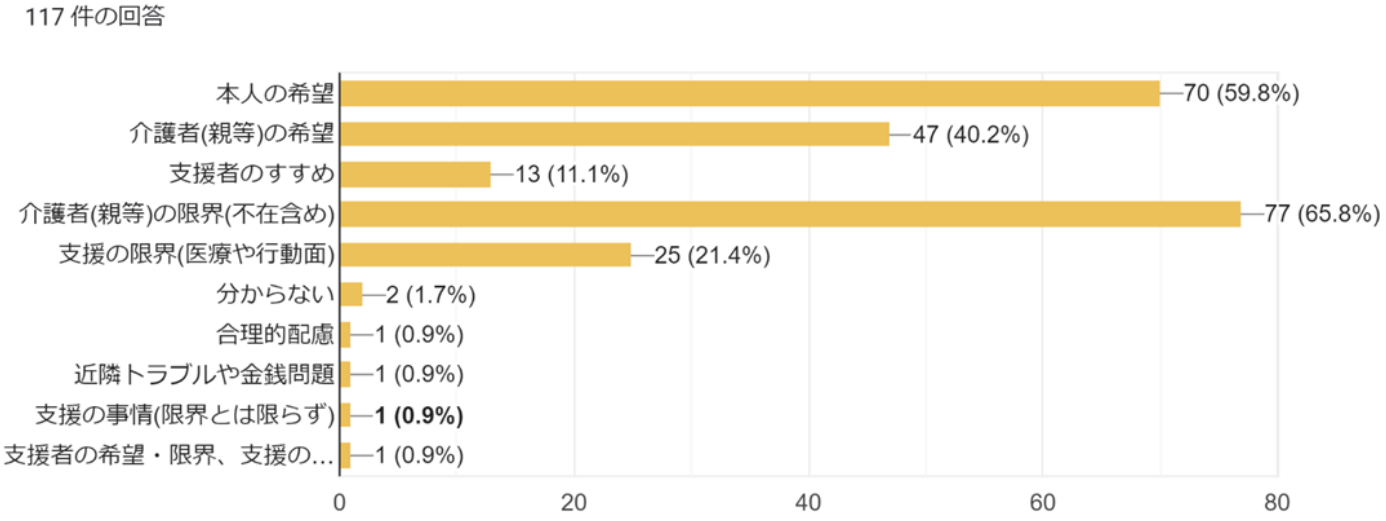


(2)アンケート結果

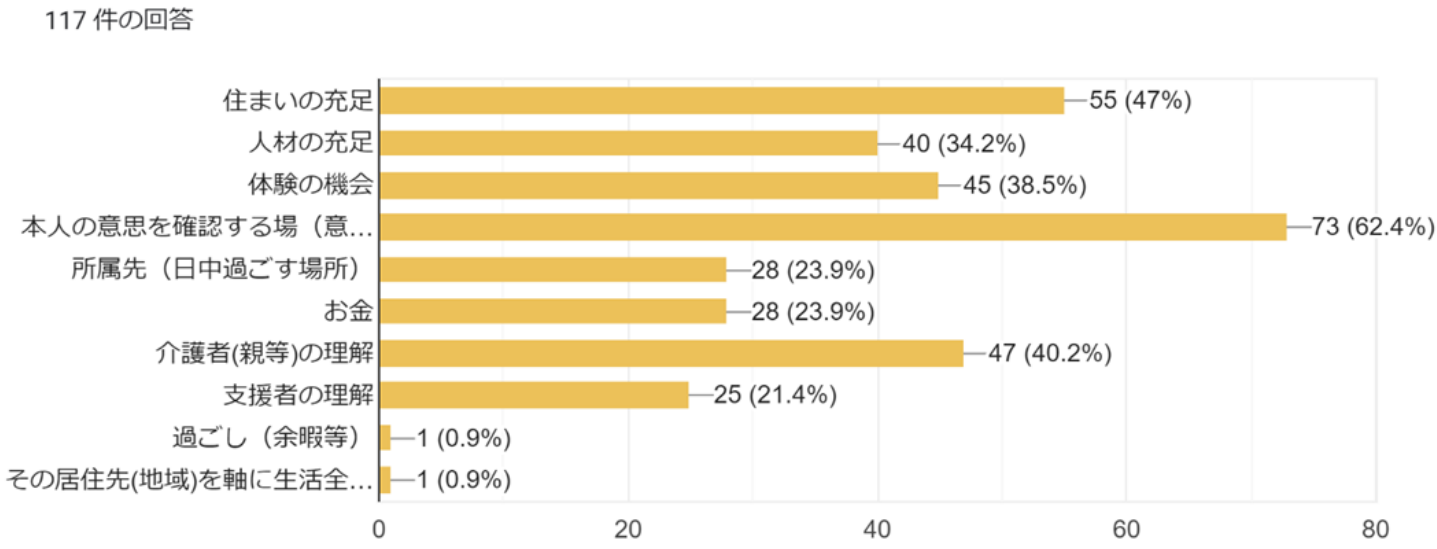
Q１：障がいのある方々の生活の場として、想像できる場所をお書きください(複数可)。



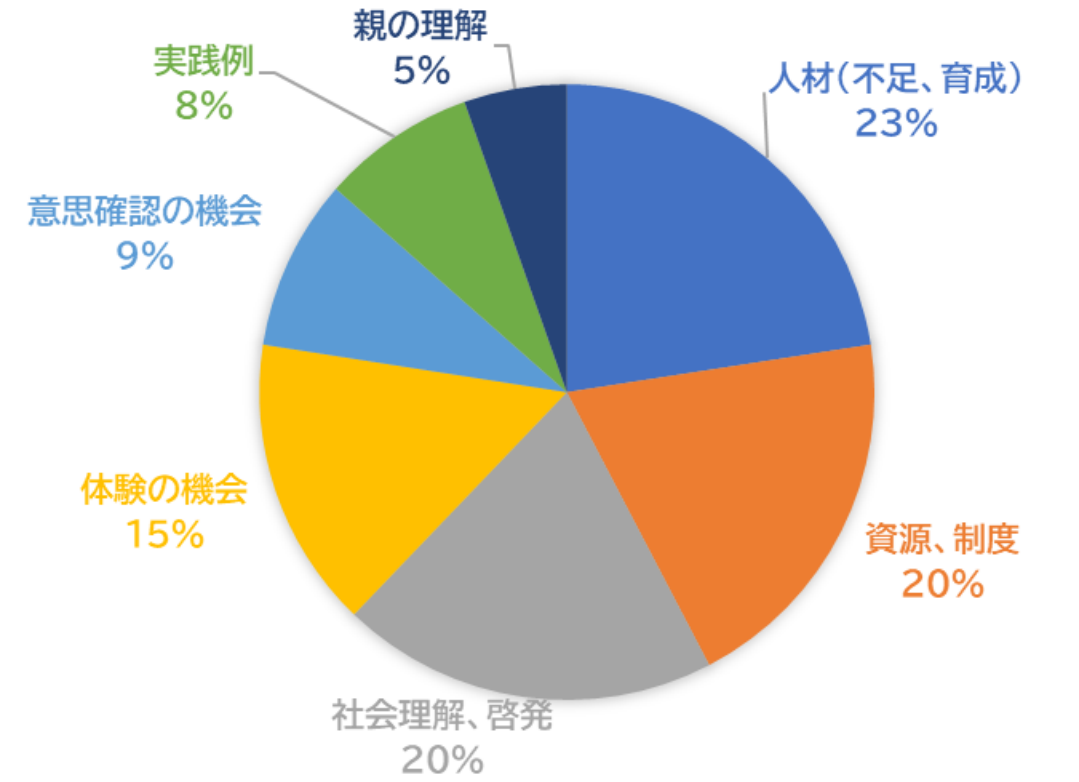
Q2：生活の場の選択や、変更（引越など）をする場合、そのきっかけとして当てはまる事由を、上位２つまで選んでください。



Q3：生活の場を選択する際に、必要と思われること、優先順位が高いと思われることを３つ選んでください。



Q4：生活の場の選択肢を増やすために、必要と思われることがあればお書きください。



※Q4 の回答（一部抜粋）

【人材（不足、育成)】

・多様な選択肢をイメージできる知識、アイディア、つながる力
・当事者にかかわる人々の理解と知識
・支援者が可能不可能と決めつけずに知識と引き出しを増やすこと。
・今までに見てきた・経験してきた枠にとらわれない柔軟な発想！
・支援員、スタッフ集め
・生活の主体となる環境にとらわれず、アプローチが図れる人材とそれを支えるシステム

【資源、制度】

・選択肢として選べるだけの資源
・重度訪問介護制度の周知・理解促進、重訪の支援者の充足、障害者が安心して暮らせるアパート等の充足など
・自立生活援助に近いサービス
・国の補助と福祉の政策強化
・多様な体験の場、多様な社会資源
・民間サービス参入の制度変更や工夫

【社会の理解、啓発活動】

・GH 建設への反対運動を受け、社会的に周知する機会や、日本社会の文化教育の向上が必要。
・身近な地域ですでに暮らしている障がい者がいらっしゃることを知る機会。地域の理解・支援
・社会全体の理解と支援者の行動力
・サービス提供事業者の理解だけでなく、社会全体の障碍者とその支援者への理解
・一度、居住先を決めたら（移行した方）そこが永住先と思われている風潮の打開。

【体験の機会】

・色々な場所での体験、そのアフターケア。ご家族にも現状を知ってもらう機会(新しい場所への理解や本人の様子)
・体験の機会の場が多いと選択肢が増えると思います。
・他の生活の場を体験できる機会の提供・経験談を聴ける機会の提供
・体験の機会。やってみてわかる事も多いと思うし、家族、本人共に不安を減らすことができるのではないか？

【意思確認の機会】

・体験、本人の希望の確認
・意思決定支援を実践しているケースに触れること、知ること
・支援者、家族も思い描いている暮らしが違う。それを擦り合わすような機会。本人が強く希望を言える場も必要。

・ご本人の希望を聞くこととその希望をどう支援していくか支援者が話し合うこと

【実践例】

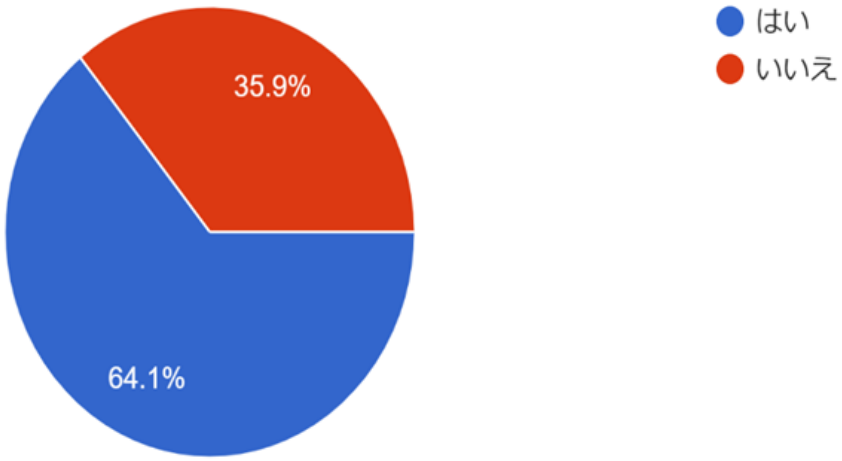
・様々な支援ノウハウの共有　一人暮らしであれば物件オーナーの理解
・実践例が増えること、これの周知と理解の促進。
・同じ程度の障害の人が、支援込みで自立生活をしている前例
・実際に地域で一人暮らししている方の事例の共有（支援者・介護者）

【親の理解】

・保護者の理解（一度入所したら必ずずっといるという拘りを捨ててくれる）
・擁護者の理解、支援機関の充実
・本人、家族、支援者等周辺が一緒にリスクを負う勇気と覚悟。

Q5：法人内に自立生活プロジェクトが発足し、活動をしていたことを知っていましたか？

117 件の回答



Q6：最後に、このプロジェクトに期待すること、ご意見等ありましたら、ご忌憚なくお書きください

【このプロジェクトへの意見・要望】

・このプロジェクトを通して、生活の場を変えられた人について、そのプロセスなど知れる機会があるといいと思います。

・自分の場合、直接的な支援や介助、日々の業務に追われ、末端の支援者が利用者の自立支援について深く考えられる機会が少なく感じる。直接、ご家族・利用者の思いや理想を聞き、感じ取る機会が多いのは自分たちなので、そういった末端の職員とプロジェクトが上手く繋がり、機能することを期待しています。

・自身の担当ケースの方が生活の場を変える際に、準備段階から、ぜひこのプロジェクトチームの方のご協力、ご助言をいただきたいです。今後の活動に期待しています！！

・実践から積み上げたノウハウを、エビデンスとして支援技術体系として整理し、法人や組織にとらわれず、連携し支援を広げる事。

・私自身も障害のあるきょうだいの自立生活について悩んでいるので、機会があれば詳しくお話を伺いたいです。

・共生会の利用者さん自身が日ごろ話される希望や意見、また学校卒業後の進路での悩みにも耳を傾けたものとなるよう期待いたします

・大家さん、不動産屋とのパイプを！

・色々な方の実践例の報告をお聞きしてみたい。一度 GH にお住いの方が、203 号室を利用し一人暮らしの第一歩として体験をされましたが、まずは一泊の旅行の扱いで、重度訪問介護の移動加算として、「お風呂には入らない」、「食事は調理は出来ない為、買ったものを食べる」といった想定で利用されていました。この方が第二歩目としてもう一度利用したいと思った時にどんなハードルがあるのか？がまだ分からない部分が多くあります。他で体験された方で、どんなことがハードルになっているのかを知ることで、同じハードルを感じている人が一緒に考えていくきっかけになるかと感じます。

・通常業務も大変な中お疲れ様です。頭が下がります。真に選択ができるためにこのプロジェクトでガンガンに課題提起をしていってほしいです。

・ご自宅や入所施設から、GH や単身生活に移行された方の体験談などを、これから生活の場の移行を考えている（または移行を視野に入れている）ご本人や家族、支援者と共有できる機会が増えたら良いなと思います。

・現在 2 名の入居者の一人暮らしに向けて動こうとしているところなので、色々と参考にしていきたい

・一人暮らしの練習の場、アセスメント

・医療や教育など障がい者への理解向上活動

・単身生活の体験の場は共生会で試行的におこなっていますが、そのときにヘルパーを入れての生活の模擬ができるようになるとより利用者さんの体験になるのではないかと思います。（現状だと住まいの場ではないので居宅ヘルパー導入は難しいと聞きました）あと、両親と一緒に住んでいる方は、親亡き後はグループホームに入りたいと希望を出す方が多くいらっしゃいます。ゆくゆくはGH、という方に対しては現状だと地活のショートステイなどを使って宿泊の練習程度の体験しかできないので、グループホームに模したもので、グループホームの生活体験ができる場があると気軽に将来の生活の心構えや準備ができるのではないかとも思います。自立生活プロジェクトの今後に期待しています！！

・現所属事業所の利用者さんに何名か現実的に自立生活支援の必要性（本人の意思含む）が出てきており、非常に興味のあるプロジェクトだと思っています。具体的にどのような話し合いをされているかも興味があり、もし機会があれば見学等させていただき利用者支援に活かせるものを勉強できたらとも思っています。

・プロジェクト活動をしてくださっているのは知っていますが、なかなか活動内容が見えてこず、皆さんの頑張りが法人内に知れ渡っていないように感じてもったいないなと思います。もっともっと皆さんの活動が法人内に知れ渡っていくといいなと思います。知れ渡ることでさらなるアイディアや意見が出てくるように感じます。

・プロジェクトの取り組みを途中経過でもいいので、定期的に共有できるといいと思います。

・そもそも論になってしまいますが、何をもって”自立”なのか、といった様なソフト面と、実際の生活の紹介などのハード面？といった発信を期待します。

・1 人で自立生活できる方が増えると良いなと漠然とした思いではありますが、色々と大変な場面もあり中々難しいことが多いかもしれません。何か出来ることがあればお手伝いできればとも思いますし、皆さんがどんな考えをしてるのか色々知れるような共有があると嬉しいです。

・やる前からしょぼくれたことを言うのはナンセンスだと思うので、色々やってみたらいいと思いました。（期待）制度のことは勉強不足なのですが、独居練習の際に在宅でしか利用できないサービ

スも受けれると生活の想像の幅が広がったりしていいな、と思いました。（区によろしく取り計らうとか）（期待）

・とても興味深いです。当所にも可能性のある方もいるので是非事例を拝見したいと思います。

・事例を複数もち、福祉の中に留まらず社会にアピールするアクションを起こす。共存や共生という言葉が、世間で動き始めた今だからこそ…

・以前所属していた場所で、車いすの方が一人暮らしを希望して一緒に色々探したりしていましたが、一人暮らしをできる場所の確保がまずネックとなりました。希望する条件で物件を借りる事が難しかったり、そもそも合致する物件が少なかったりしました。その当時は CORE さんに協力いただいていましたが、なかなか一支援員が動くには難しい事も多かったです。選択肢を増やすことは私の支援員としてのモットーでもありますし、本人・介護者にとっても必要な事だと感じています。体験の機会や、こういう場所があるんだ！という物としても様々な情報や体験を提供できる場所であって欲しいと思います。

・単身生活を希望されながら、ホームで生活している方が複数おります。プロジェクトが単なる勉強会、啓発に終わらず、世話人等といっしょになって、段階的に実際の単身生活までつなげられる（その後のサポートまで考えた上で）実働部隊となれたらいいなと思います。

・入所施設で長く生活支援員をしていると、施設以外で自立生活を送っている方の事例に触れることが少ないため、ご家族より将来的な生活の場についての相談を受けた際に、具体的な話を何一つできず、ということがあります。プロジェクトからの研修等に可能な範囲で参加し、視野を広げていけたら良いし、仕事のモチベーションにもつながるのかなと感じています。できれば、勤務内で参加したいですが。

・Q4 と重なるのかもしれませんが…。　ショートステイのような数日単位ではなくて、月単位で体験できて、変更後の生活のイメージを作れるような体験・経験ができること。そして体験・経験の振り返りがきちんとなされることを期待します。

【その他（法人等）への意見・要望】

・法人内 GH でサテライトを増やしてほしいです。

・横浜共生会の各施設が自立生活の提供・支援という目標に向かって日々具体的な取り組みを行うこと。

・利用者様、メンバー様方々や支援者の方々がさらに有意義に過ごせる政策を行って欲しい。

・現在、未来が安心に穏やかに暮らしていける多くの場所から選択できる事。年齢に応じ、長期に渡り関わって行ける事

・①法人内各施設が本気になって「地域との共生（創り・交流)」を今展開しているか。②上記なくして「自立生活プロジェクト」はなりたちますか。③また法人内で「意思決定支援」の仕組みと実践を考えてみて下さい。　（提起だけでも必要）　　④文書をまとめ法人また行政へ提起も考えてみて下さい。

・法人としてのアパート経営

・法人内でプロジェクトが活発化するのは良いことだと思います。これからよりマンパワーが必要になってくると思うので、若手の採用が急務になるのではないでしょうか？そのためには、若手が働きたいと思うようなシステム改変も必要な段階にきていると思います。

・サテライト型 GH よりは支援が少なく、利用できる方もそれほど多くないのではないか？しかし、親元を離れて単身生活をしてみたい方にとってはとても心強い存在だと思います。何か困った時に助けを呼べるシステムが整うとさらに良いのではないか？と感じています。

・共生会らしい、新しい事業展開。

・“自立生活”を実現するには、先ずはご本人の意向が第一で次にご家族の意向が大切だと思いますが、実際はご家族の意向がメインになってしまう事が多いかと思います。どうすればご本人の意向を最重視出来るようになるのか、意思決定支援について法人内で活発な意見交換が出来れば良いと思います。

【感想等】

・活動していることに意義があると思います。

・毎年定例で、同様のアンケートをとることに意義があると思います。

・後見的支援も親亡き後の事について考えて行く(ご本人の将来を考えていく)事業なので、是非事業としても一緒に考え行きたいです。

・本来なら本人の意思に沿って決定されるべきことが、現状は親や支援者側の都合ということもあると思います。結果的に本人に合った住まいとなり、自分らしく生きているなら良いきっかけづくりをしたとなるのかと思います。アンケートをしてくださりありがとうございます。色々考える良い機会をいただきました。

・支援者の考えが壁を作り、そこから抜けれない現状があると考えます。人手不足、重度高齢化が進む中、本人が選ぶ機会、体験する機会をあきらめない事。現場スタッフがそれを当たり前の事として、理解し模索していく事ができたらよいと思います。

・障がいが有りながらも、人としてその方らしく生活ができると良いですね。頑張ってください。

・現在は生活の場を必要に迫られて選ばざるを得ない状況の方が多いのかも知れないが、今後は余裕をもって、自分の人生や暮らしについて一緒に考え、選択できる方が増えていけると良いと思うのでとても良いプロジェクトだと思いました。

・障がいある方々の選択肢が増える事はとても素晴らしい事だと思います。自由に選べて、自由にチャレンジ出来るような社会期待しています！

・メンバー家族の高齢化で自活問題が現実的になってきました。何卒宜しくお願い致します。

・ご利用者さんの意見、意思決定を支援をする。という事は、ご本人の人権にも関わる重要なことだと考えます。支援者側として、ご本人の意思がしっかりそのまま伝えられる様に、学び、手伝わせて頂けたらと思っています。

・グループホーム希望している方が多いが、希望しても中々入居できかったり、又体験の機会を受けるまでのハードルが高いと感じています。

・障がいのある方はじめ全ての人が素敵な人生を送ることを、心から願っています。

・ご本人の意思や介護者のご意向が反映され、安心安全に生活ができるようになると良いと思います。これまでの横浜共生会というと、横浜らいずや花みずきの法人で、グループホームをたくさんもっていると思われがちかと思います。障がいのある方の生活の場の検討において、斬新で革新的な取り組みを展開し、おもしろい法人というイメージを持っていただけるよう、がんばってください。

・今後いろいろと勉強させてください。

・一度きりの人生を他者に支配、制限される人が１人でも減るように、実践を積み重ねていくことで、親族や一般の人の理解が進んでいくことを期待しています。

・自分のしたい生活ができるということが普通になるとよいなと思います。

・大変だと思いますが、どのような障害があっても自立できるんだ！と、一人でも多くの当事者や関

係者が自信を持てるよう、今後の活動に期待しています。

・色々な障害の方がいると思いますが、その当事者の方が望む生活の形を、イメージでもいいので見出していって欲しい。実現できたらならもっといいです！

・プロジェクトの活動によって具体的な自立生活のイメージを持てる利用者さんが増えることを期待します。

・障害のある方の生活する場がひろがればとおもいます。

・将来の生活の場はグループホームか施設しかないと思っている当事者や家族が多いと、仕事をしている中で改めて実感しています。自宅など地域で暮らせる選択肢があることを、説得力を持って伝えたいですし、またその選択肢が多くなることを皆が願っていると思うので、プロジェクトに大いに期待しています。

(3)考察

・Q1「障がいのある方々の生活の場として、想像できる場所をお書きください(複数可)」の設問の回答は、家での生活である「自宅」と「単身生活（サービス付き含め)」を合わせると回答数 119 件と、グループホームや入所施設を上回る数となっている。そのことから、生活の場としては、やはり家が一番イメージされる場所ではある。しかし、家（自宅＋単身生活）という回答が一番数が多いとはいえ、２番目のグループホームは 104 件、入所施設が 95 件と、数としてはあまり大差なく、グループホームや入所施設が、家とほぼ同列にならぶ選択肢として考えられていると思われる。

・また同設問で、少数ながら、医療機関（治療を受ける場）である「病院」や、一時的な宿泊場所である「簡易宿泊所」が生活の場としてあげられていることから、人によって「生活」ということの意味理解のバラつきが大きいと思われる。

・Ｑ２・Ｑ３・Ｑ４はいずれも（実態としてどうかではなく）支援者のイメージを問う設問になっている。その設問の回答から、本人の意思を確認する場（Ｑ３回答より）が生活の場を選択する際に重要であり、また、生活の場を選択する場合のきっかけとしても、本人の希望（Ｑ２回答より）による部分が大きいと考えられているなど、本人中心で支援をすることの重要性は、支援者間である程度意識形成ができていると思われる。しかし、その一方で、介護者(親等)の限界(不在含め)（Ｑ２回答より）や、介護者(親等)の希望（Ｑ２回答より）といった環境的な要因によって生活の場の変更が余儀なくされることも少なからずあるという認識も支援者の中にあると思われる。

(4)今後の課題－Ｑ６の回答より－

自立生活プロジェクトへの直接的な要望として、

・自身が担当するケースでの悩みがあったり、中にはスタッフ自身の障がいのあるきょうだいの自立生活について悩みがあったりといったことから、話を聞いてみたい。

・実際に自身の担当ケースの生活の場を変える際に、準備段階から助言や協力を得たり、実働部隊として一緒に動いたりしてほしい。

・自身のケースの参考や、視野を広げるためなどに、事例を聞きたい。

といった内容の意見をいくつか頂いている。

そうした意見を踏まえ、次年度（2022 年度）の自立生活プロジェクトでは、「事例共有班」を設け、自立生活プロジェクト以外のメンバーも参加できる形で、事例共有などを行っていくこととしている。

また、「意思決定支援の仕組みと実践を考えてみて下さい」「実践から積み上げたノウハウを、エビデンスとして支援技術体系として整理し、法人や組織にとらわれず、連携し支援を広げる事」といった要望も挙がっている。「事例共有班」の取り組みが、単なる事例の共有（こんな事例があったという情報共有）に終わらずに、事例共有をする際には、課題抽出や他でも活かせるポイントの抽出など、次のステップに活かせるような形で共有していく工夫が求められる。

そして、支援者の意識の壁が自立を阻害する要因となっているという意見や、自立生活プロジェクトの活動内容が見えないといった意見が上がっている。そのことから、今後、自立生活プロジェクトの取り組みの成果をどのような形でフィードバックしていくかについても、検討が必要である。
（尚、職員へのフィードバックの試みとして、次年度は法人ホームページの職員用ページにアップして周知を図ることを試みる予定である。）

その他、自立生活プロジェクトとしてというよりは、法人や社会レベルで求められることとして、体験の場などの社会資源の不足（そのため、法人としてのアパート経営や、不動産屋との連携などが必要といった意見も挙がっている）や、人材不足による若手の採用が急務になると思われることなどが意見として挙がっている。そうした意見に対しては、自立生活プロジェクトとしてできることと、法人レベルでの取り組みが必要なこと、社会レベルでの取り組みが必要なことなど、まずはそれぞれどのような規模での取り組みが必要かを整理して考えていく必要がある。